

老いのよそおい Vol. 1

The Preparations for Ageing

佐藤 完
Tamotsu Satou

織田 紀代子
Kiyoko Oda

長岡 さとみ
Satomi Nagaoka

(要約)

私たちは、いつの日か人生の役割を終わる。老人福祉施設の利用者の生活を概観しながら「老いのよそおい」について考察をする。高齢者福祉について学ぶ学生、大学周辺に住む地域住民、老人福祉施設利用者をトライアングルの関係性について考えを深める。

(キーワード)

老人福祉施設、社会福祉士及び介護福祉士法等の一部改正、死ぬ身を生きる

1. はじめに

福祉系大学が1都道府県に3校前後設置されている。大学、短期大学においては、社会福祉士、介護福祉士、精神保健福祉士等の専門職養成にかかわりっている。福祉系大学や短期大学が果たす役割は単に福祉専門職養成であろうか。社会福祉法の改正に伴い地域福祉の時代を強く意識されている今日、大学が果たすべき役割は地域に存在する社会福祉施設や地域住民へのかかわりが問われてしかるべきだろうと考える。各大学においては、各教員が地域とかかわりをもって研究・実践されているが、大学としての社会資源をどう地域社会にかかわることも必要である。本学は、学苑関連施設に社会福祉法人高田福祉事業協会高田光寿園¹と社会福祉法人高田真善会報徳園という特別養護老人ホームを有する。高田光寿園は、1921年（大正10年）に創設された三重養老院から始まり、2006年（平成18年）4月に開設された本学人間介護福祉学科との関係性を改めて問いたい。本年完成年度を向かえた人間介護福祉学科は、多くの養成機関に見られるような介護福祉士専門職養成を主眼とした学科ではないとするとその依拠する背景を探り出したい。すでに述べたように高等学校や専門学校、短期大学、大学等々全国に展開されている介護福祉士専門職養成は、介護に関する専門的知識、技術の習得と利用者のニーズ、介護福祉専門職として必要とするニーズを導き出し調整し利用者にサービス提供される福祉人材養成であろうか。本学は、夏季に本学周辺の住民への介護公開講座を開設している。介護福祉専門職を養成しつつ、近隣住民への介護公開講座、86年の歴史的背景と利用者に寄り添った実践を心掛けてきている老人福祉施設との関係を紐解きながら老いを迎える地域住民が夫婦ともども豊かに生きることが出来る姿を「老いのよそおい」と題して概観したい。

2. 老人福祉施設と介護福祉士養成校

高田福祉事業協会は、真宗高田派を母体とする。高田光寿園現施設長の高林光暁によれば介護保険が始まる前には、三重県内の特別養護老人ホームの「質の向上」を意図し、指導員（介護職員）2名程度を一定期間に夜勤も含めて施設巡回研修を実施した。各施設のもっている良い点を直接体得させることを通して三重県下の特別養護老人ホームは、何処でも同じサービス提供ができることが必要だという理念をもって実施された経緯がある。このように一施設運営、質の向上を図るだけでなく近隣老人福祉施設全体への質の向上を意図した研修を立案し計画・調整・実施してきた。今日の競争原理を主体とした施設経営や運営ではなく、近隣住民の高齢者の生活を支えてきた。

関連する老人福祉施設においては、利用者本位と言われる実践を常に心掛けて86年を踏まえ社会福祉実践を概観することは本学の学科理念をさらに鮮明にし、介護福祉士養成のあり方を問うものである。大学と老人福祉施設の関係は、先駆的实践校としては、東北福祉大学（特別養護老人ホームせんだんの杜）、立正大学（特別養護老人ホームたちばなホーム）等々がある。最近では福岡県の西南学院大学においても大学と老人福祉施設の関係とし設置されるようである。大学に設置された老人福祉施設は、研究者の目線と施設利用者の目線に上下関係を生じかねない。現実には最愛の夫又は妻を失い「老いや病や障害」をもって家族からも離れ、一人老人福祉施設で高齢期を生活している。中には認知症を患い日常生活さえままならない施設利用者や個室利用されている利用者の一人は、施設見学に訪れた学生が通り過ぎた後そっと部屋から出てくる人もいる。介護福祉士倫理綱領の「7」にうたわれている後継者の育成は、施設としての責務である。安心して質の高い介護を受ける権利を享受し、介護福祉士に関する教育水準の向上と後継者の育成のために「利用者が施設見学に訪れた自室の前を通り過ぎた後にそっと部屋から出られる」事実を受け止められる後継者の育成をされなければならない。後継者の育成のためにも施設利用者からの視座から専門職養成校のあり方を問い、大学と施設の連携ではなく、施設利用者と専門職養成校に学ぶ学生との連携のあり方から本学専門職養成校のあり方を問うものである。

3. 高齢期を迎える団塊の世代の生活

一昔前までは、子育ては二度行われた。母親は子どもが生まれ手が離れるまでは子育てに勤しむ。手が離れるようになると家事全般が増え、子どもは祖父母の手に委ねられ、子どもの生活環境における生活技術能力や地域の文化を高齢者から伝承される。その営みが脈々と受け継がれた時代があった。前国連事務総長のアナンは国際老人年に「老人は一つの図書館である」と述べた。

戦後の何もかも失った国策の一つは、健康で文化的な住宅の供給が急務であった。1951年に当時の建設省が公営住宅の標準的な間取りである「51C」型を発表した。² 35平方メートルの室内に台所と食事室を兼ねたダイニングキッチンと呼ばれている一室に二間の和室、風呂、トイレを配した間取りである。当時の社会状況下ではモダンな住宅であった。しかしながら、この間取りの中に両親との同居が何処まで可能であったのであろう。老いていく両親との同居を難しくした物質的な要因があるのではないか。また、和紙と木製建具を基本とした間取りから、家族間のプライバシーの確保した洋風住宅と大地震を想定し耐震構造の手段として壁面積の増加させてきた。壁化、個室化は、核家族の間をさらに乖離させ

てきたといえる。³ 障子と襖の和紙で仕切られた間取りでは、家の中には家族の気配を感じられた。

昭和30年代後半から親と同居という生活形態が住宅状況からも少なくなり、核家族化が流行り新興住宅や公団住宅が乱立した。個々の家庭では白物家電（3C）をそろえた生活を謳歌してきたのが団塊の世代である。子どもの数も一人から多くて3人位であった。団塊の世代は、高度成長の時代を生きぬき郊外に一軒家が構えた人たちも多い。やがて子どもは一人前になり結婚し家を離れ、家には夫婦が残った。子どもが独立し家に残されたのは、夫婦や配偶者との死別、離婚し一人暮らしの人が生活を送っているのが現状であろう。中には親と同居し親を看取った方もある。自分の最期は子どもに看取ってもらえると考えるのは難しい時代である。さらに高齢になり介護が必要になった時は老老介護も避けては通れないことを心配しながら今を生きている。夫婦が老いていく中で病を患い配偶者の片方が介護している現状もある。

ある靴屋を営む夫婦は、奥さんが脳梗塞の病を患い娘二人と共に献身的な看護をする。やがて症状も安定した時に娘が「これからお母さんをどうするの？」と聞かれる。父親は、娘達が母親を看ることができないことを察知し「私が靴屋をしながら介護する」と言った。右上下肢に麻痺が残り歩行もままならない状況で通所リハビリに出かける。食事の支度も病院から聞いてきたレシピを基に作り出すのである。手の空いた時にはリハビリを兼ねて近所を散歩する。昨今のウォーキングには程遠い散歩であるが、彼女の歩行のリズムに合わせると普段気付かなかった風景が観えると言うのである。普段の秒刻みのあわたしい時間の中で過ぎ去る風景ではなくカタツムリのような歩行のリズムであるがゆえに観える風景である。食事の時彼女は「私は人生を2度も生きている」と話す。「一つは元気な時の私、もう一つは病を患った今の私」と答える。この夫婦の場には、お互いの人生そのものを支えあいながら老いを生きる確かな意味が内在する。夫婦という尊い存在が確かにある。当然のように娘達も店番等々にかかわりつつ来ている。娘は、両親の食事を見て、私達が育った時より惣菜が1品多いと言った。この家庭の場には、誰しもが人生の後半に遭遇するであろう「老いを生きる姿」「老いを看取る姿」があり、夫婦としての確かな人生の価値を親と子の間に内在している。

4. 看取の準備

先端技術や医療技術の進歩により長生きできる対価として、認知症を抱える高齢者も増えている。自分の人生をどのように終末を迎えるか自己決定できないまま、家族に託さざるをえない状況も多くなっている現状もある。

最近の高齢者は、郊外の住宅を離れ交通アクセスが良く買い物や通院に便利な都市型のマンションに移り住む傾向が見られる。一方では病を患い病院や老人福祉施設に生活の場を移さざるをえない人もいる。病院への入院を承諾するのは病が要因であり治療に専念し、少なくとも社会復帰あるいは自宅での日常生活に戻ることを大前提としている。入院する本人は、「生」を前提としているが家族は重篤な病であれば、その人の「死」を了解しつつ気遣い、見舞うのであろう。病院は、生きることが前提であれば、死をもつての帰宅は敗北ともいえる。死は他の入院患者にも心的に影響を及ぼすので、亡くなった方は専用の裏玄関から送り出す。人の命は尽きるものである。病院の正面玄関から病室に入り、余命少

ない患者さんのより何処であるターミナル・ケアといっても、命が尽きたら専用の裏口からひっそりと病院を後にするのである。

一方老人福祉施設への入所は、終の棲家であるはずであり死を迎える場である。逝去した時には、手際の良い商品化された葬儀社の手により病院から直接斎場に運ばれ、パッケージ化された葬儀、葬祭を営まれ死への旅立ちをするのであろうか。一部の高齢者では、親を看取る時代を我慢してきた。では、施設利用者の終の棲家はどのようなものであろうか。老いを生きぬき、死へ向かう高齢者の社会的な価値や尊厳は何処に確かな実感として実在するのであろうか。高齢社会の中で人生の終焉をどのような生活の場で位置づけ了解されるのであろう。老人福祉施設が終の棲家でなくなっているように思える。7～8割の利用者が病院で亡くなっているのである。理由は様々であろうが、施設では人の死を看取られなくなっている。人は高齢になれば必然的に加齢による病や障害を生じるものである。年を重ねれば確実に死は訪れる。死を家族や施設職員はどのように了解するのであろう。施設で死を看取るだけの器がなくなっているともいえる。老人福祉施設を利用するには、家族は、終の棲家であり人生の終焉を看取るという了解が何処までできているか疑問である。それは老人福祉施設利用者への面会回数からも知ることができる。老人福祉施設では利用者が重篤な状態であれば家族の意向で医療機関に移るのである。

終の棲家ということがどのような意味をもつかということを改めて考える。国際生活分類（ICF）における健康指標が、健康で文化的な生活機能を求められようとしているのではないだろうか。⁴ 高齢になり子どもや周囲の人達に迷惑をかけないように心掛け老いを生きている。老人福祉施設においても死を了解できる施設職員に出会いたいと思う。老いて亡くなることは避けられない事実である。病やしょうがいをもたれた高齢者にかかわる者として、死を生活の延長として家族ともども受け入れ、了解されなければならない。

ある地方では、村民が亡くなると村で葬儀一切を営む。火葬は村の斎場で執り行われ、火葬されししばらくすると亡くなられた方が、風に乗る村を通り抜けてゆく。住民は、「最後のお別れに来たね」と話し、その人の死を了解できる地域でもあり環境でもあった時期があった。

利用者は、今まで生活してきた個々の人生や住み慣れた家を離れ、築いてきた人間関係を断ち切って施設に入るわけである。家では「お母さん・お父さん」呼ばれていた生活から「〇〇さん」と呼ばれる利用者になるのである。身の回りの利用者は知らない人ばかりである。人生経験から人間関係を上手に築ける人、なかなか人の中に入れてくれない人など様々である。また家族から見捨てられたと思う利用者もある。家族に捨てられたと思込んだ利用者は寡黙になり、職員に言葉での意思表示が亡くなることもある。その上に利用者同士の会話もなく、居室に閉じこもり、入浴を拒否し、食欲も低下し、生命維持が危ぶまれる状況となる。報徳園では入所の際に、このように状況があり生命にかかわることがあることを家族に説明する。入所1～2週間は「面会の回数を多くもって欲しい。利用者本人の好物や嗜好品、家で愛用していた服、家族の写真を持参して面会に来て欲しい。生活の場所は変わっても家族の一員であるということを高齢者が理解できるなら伝えて欲しい」とお願いする。生活の質「Quality of Life」を単なる専門的用語の理解としての「QOL」ではならない。施設サービス利用者にとっても「Life」を生活と狭義に捉えるのではなく、1. 生命・命（医療を伴う分野）、2. 寿命・人生（日常生活の活

動)、3. 生涯・人生(教育と福祉分野)として理解したい。終末期を迎えようとする人はいずれ医療の分野を離れる。介護者は、福祉的な援助を基盤にしながら尊厳ある一人の人生そのものの側にたち、寄り添わねばならない。利用者へ健康的で文化的な生活の援助のできる人材の養成に努めなければならない。本学関連の二施設では、先駆的な取り組みに心掛け、終の棲家となる老人福祉施設の理念を通低していることは本学科生の介護福祉士専門職養成の根幹にかかわる要因がある。健康で文化的な生活を支える努力をする理念は本学学生に紡がれなくてはならない。

5. 高田福祉事業協会・報徳園の実践

実習施設となっている報徳園の平成18年、3月末現在110人中23人が1年未満で退所している。15年以上生活される利用者がある中で疾病、年齢も加味されるであろうが、やはり施設生活に適応しにくいことの表れの一つかと思えられる。介護者は、日常の介護の中で「終の棲家」となっている場において看取という営みを生活の質「Life」に重要な場として位置づけ、改めて人の尊厳として自覚しなければならないのではないか。

本学には報徳園に介護福祉士として20数年働いてきた織田がいる。ある高齢者(女性)は一つの荷物の包みを解き見せてくれた。本人がまだ若く、四国八十八ヶ所のお寺巡りをして白い木綿の着物に朱印を押してもらった。この着物がそれである。「ありがたい着物である。私が息をひきとった時、この着物を着せて棺に入れて欲しい」と言われた。

女性のある高齢者であるが普段から着物の生活が多かった。この着物は一度も袖を通していない。私が「死んだらこの着物を着せて送って欲しい」と言われた。このように自分の最後を家族でなく施設の職員に託す気持ちはどのような思いであろう。施設で生活されている利用者は、自分達は親を看取り、自分も住み慣れた家で子ども、孫に囲まれた生活を考えていたであろう。まだまだ死を迎えるには随分先のことでありと考えていたに違いない。施設利用者は自分の最後を何も考えていないのか、特に男性利用者からはこのように申し出を聞いたことがなかった。逆に「ここで、最後までお世話になるわ」と気丈に言われる方もあり、もう家には戻れないという覚悟みtainな雰囲気を感じとった。

曹洞宗「禅の友」⁵ 5月号で秋田県宝昌寺住職新川泰道は、「寺の各種行事や講に参加される頻度の高い高齢者は、寝たきりや認知症になりにくいとの感覚をもたれているようである」と述べている。檀家が、「座禅・勤行・御詠歌を勤めになられる」ために寺に足を運ぶ。その様子を概観すると、高齢者が多いのは当然のことながら高齢者が生きがいをもって寺に足を運ぶようである。結果的に老いのよそおいが豊かにみうけられる。お寺を基盤とした高齢者の社交の場となるとともに介護予防の役割を担っている。施設における利用者の生きがいとは何であろう。

老人福祉施設は終の棲家でもあるはずである。一人の人間の死を施設はどのように受け止めるのであろうか。施設におけるターミナル・ケアはどのように営まれているのであろうか。一人の肉体的存在の逝去は、次の利用者への受け皿と化すのであろうか。生命ある者にとっては社会福祉サービスを利用する利用者は、3人称としての存在であろうか。利用者や家族が希望すれば施設において葬儀が行われる。まさに終の棲家そのものである。葬儀には利用者も参列し棺は施設の玄関から施設職員等々に見送られ、

遺骨は玄関から仏壇に納められ焼葬が営まれる。

高田福祉事業協会のT園とH園の一日は、朝の洗面から始まり、着替え、朝食、歯磨きと施設によって決められた日課によって生活が始まる。朝のお勤めが園主により行われ法話がされ、念仏を唱える。時には利用者故人の法要も営まれる。仏教の施設ということで、毎朝「お参り」がある。その仏参の時、利用者はどのような気持ちで「お参り」をしているのか尋ねたことがある。利用者の各々の思いはそれぞれ異なるが、次のいくつか挙げてみた。①毎朝、お参りできることが幸せ。②仏間で皆に会えるのが嬉しい。③家の家族が元気で暮らせるように、手を合わせる。④リュウマチで痛い箇所が少しでも痛みが和らぐように。⑤この施設で長生きできるように。⑥御院さんの話を聞くのが楽しみ。⑦お参りの後の簡単な体操で体が軽くなる。⑧嫌だけれど、連れてこられるので仕方がない。一部の方の思いであるが、朝のお参りにおいてはこのように思っていることを知った。「〇〇さん、〇回忌」の法要にお参りし、焼香しても「可哀想に、早く行きなした（他界）なあ」としか受け止めていない。自分はまだまだと…。「死」なんか考えていないのが現実ではないか、また考える余裕もないと思う。一方では「死」は恐ろしい、死にたくないと思っている利用者もいると介護職の経験から感じる。本学教員の織田、佐藤、長岡でT園とH園の利用者に聞き取り調査をさせて頂いた。アンケート項目は資料1、分析結果は、資料2を参照。

まとめ

養護老人ホームで、コミュニケーションを取れる方28名から聞き取り調査を実施した。そこから高齢者の死生観もふくめ高齢者の生活を探った。

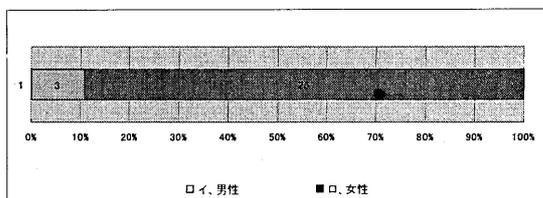


図-1 男女比較

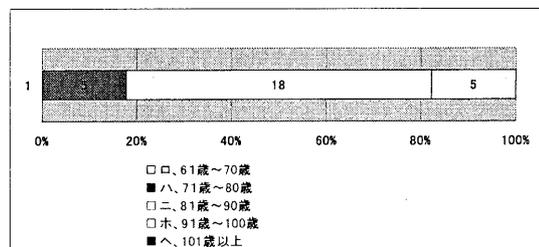


図-2 年齢構成

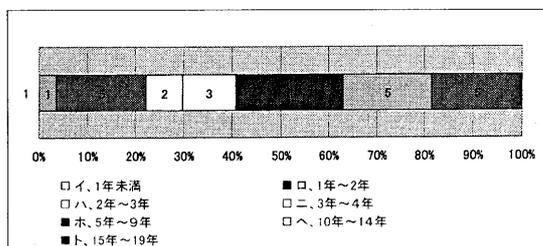


図-3 入所年数

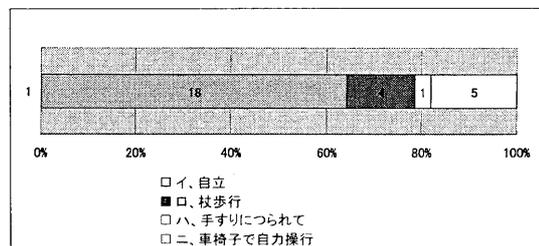


図-4 施設での生活

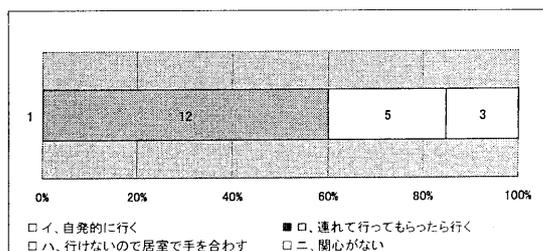


図-5 朝の仏参への参加

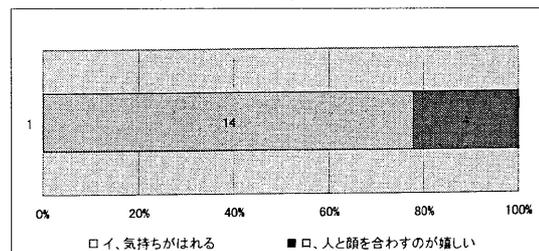


図-6 仏参に参加する気持ち

「老いのよそおい」 Vol. 1

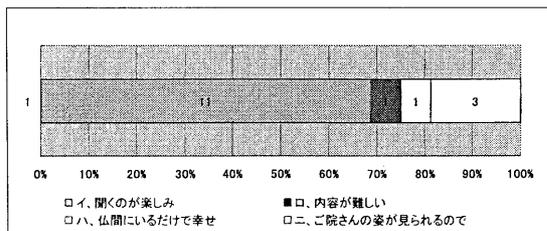


図-7 法話への気持ち

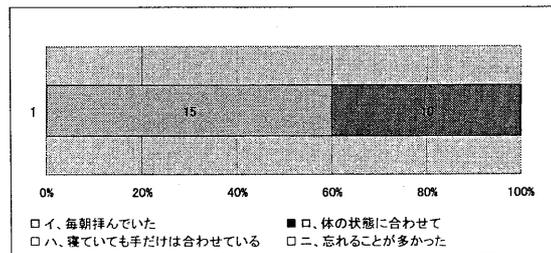


図-8 入所前の仏壇のお守り

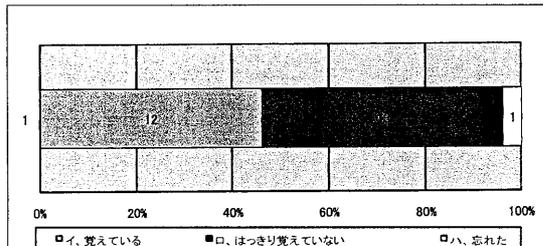


図-9 お七夜について

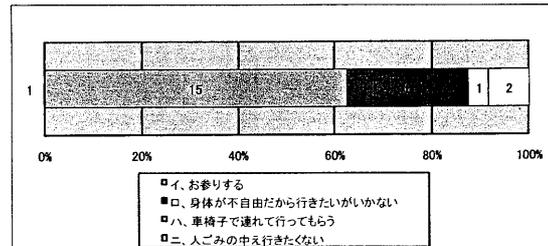


図-10 お七夜への参加

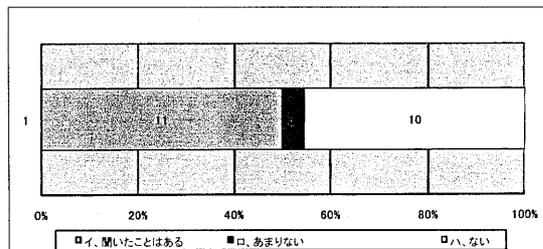


図-11 お七夜の説法について

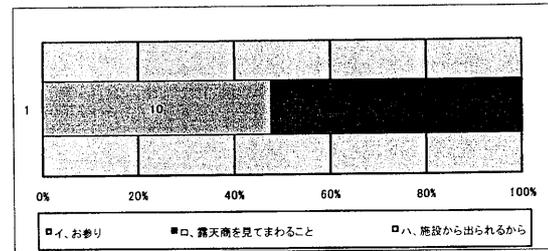


図-12 お七夜の楽しみ

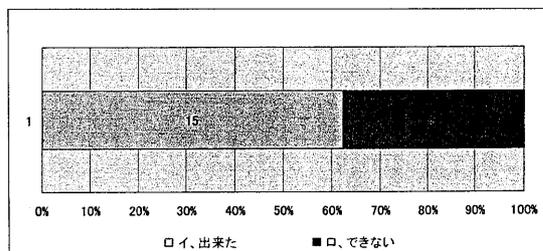


図-13 友達ができたか

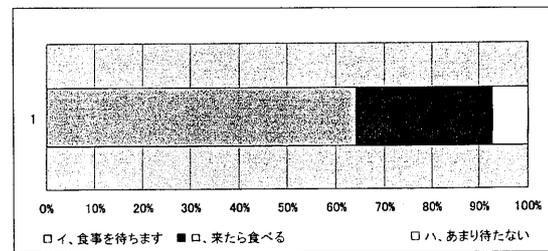


図-14 食事について

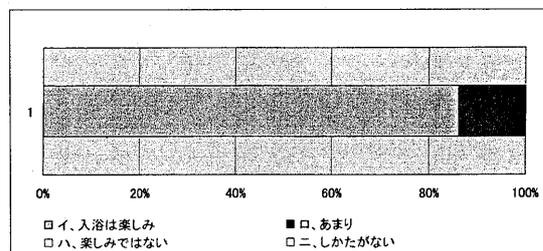


図-15 入浴は楽しみか

男女比では、圧倒的に女性が多い。女性の方の多くは戦争未亡人であった。第二次世界大戦直前又は戦争中に結婚し、最愛の夫を戦地に送り出した。終戦と共に最愛の夫が帰ってくるものと信じ待ち続けた。総務省統計局の統計データ人口ピラミッド⁶から分かるように75歳～87歳までは男性が少ない。この場には統計的数字ではなく、平和教育の視座からも今を生きている存在する。ある男性の方に入所後

に友達ではきたか聞くと「できない」と語る。此処の居室の並びには男は私一人だ。最近では耳も遠くなり相手から言われたことが良く理解できない。勝手にうなずいて誤解を生むのもお互いに困る。今は、できる限り話をしないようにしている。同様なことは女性の方にも言えた。加齢により耳が聞こえにくくなり相手の言っていることが分かりにくい。私が適当に返事をして誤解を生むのはかなわない。会話をすることはないと答えた。施設での生活の中で利用者なりの生活の配慮をされているのであろう。入所年数が5年以上の方が全体の64パーセント（18名）を占める。施設という共有された場と時間の中で生きる術を「お世話になっている」「厄介になっている」という言葉を多くの利用者から聞き「日々がありがたい」と感じている。

入所の際に、家にあった仏壇を施設に持ち込めないで知人に譲り渡した。せめてお位牌だけでもと思えば、住み慣れたわが家を訪れると更地となり知人に譲った仏壇の中のお位牌はすでに片付けられていた。施設利用者の生活の指針は、独居の身であり「他人に迷惑をかけない」生活を営むことである。学生に語る生活の場であり自己選択・自己決定を求める場とは対極する生活の場が此処に存在する。施設での生活は加齢と共に身体的に病を患い不自由さがあるものの自力で生活している。本施設は浄土真宗を基盤とし毎朝「仏参」が行われる。60パーセントの利用者は仏参に参加する。それは入所前に仏様のお守りをしてきた延長線でもある。高田本山で営まれるお七夜についての理解もされており真宗への理解をされている。その基盤に立って施設で日々の生活がされている。利用者にとって食事や入浴は生活の基本となることであり楽しみにされている。入浴時間も午後の時間帯、夕食後の時間帯等決められた時間の中で各自の生活リズムに合わせて利用されている。

終の棲家として日々を生活する中で、葬式の費用を用意している人や孫に費用を預けている人が居た。お棺に入れて欲しいものは、写真や愛読書を入れて欲しいと願う人、着物を用意している人や姉から頂いた服を入れて欲しいと数は多くはないが心積もりをされている方がいた。旦那のお位牌や愛読書を入れて欲しいと願っている人も居る。又、80～90歳になって病んで人の世話になって、葬式にも来てくれないことが苦になる。病を患い植物状態になってまで迷惑をかけたくないと思い、早くお迎えに来て欲しいと願う。利用者は、迷惑をかけたくないと願っているのである。

この時代を生きてきた利用者の当時の家風は、男性は甲種合格を誇りとし出兵することが家や地域の誇りであった。女性の結婚観には、添い遂げることが前提にあった。昨今のような離婚は家にとっても恥ずかしいことでもあった。男は戦地に赴き最愛の妻や子どもを残し戦死した人たちがいた。女性の一人は、戦争中に結婚し戦地に夫を送り出した。戦後、私のもとに戻ってくることを信じて待ち続け戦争未亡人となった。その心情は今の学生に何処まで理解されるのであろうか。別の利用者は、「私は姑に23年間つくした。その後、嫁に15年つくし此処に来た。」と語る。この人の38年間の耐え尽くした人生をどのように理解し傍らに寄り添うのだろうか。又、75歳から87歳までの人口動態をみると第二次世界大戦中であることが記されている。しかし、その数に潜むその時代を生き抜いた人生が刻まれている事実を現代に生きる若者に紡ぐことが必要である。介護養成で高齢者の身体介護を基調とした介護技術の習得の裏側に潜む戦争を生き抜いてきた高齢者に内在する心情を単なる平和教育でなく、利用者との係わり若い学生に情感をもって体得させることも必要である。それは、日本国憲法の条文にある「日本国民は、

恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであつて、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。」とある。人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するする場でもある。高齢者の生活の場を通底することにより平和について21世紀の担い手である学生に伝承されなければならない。その延長線上にある高齢者への介護であり、看取りの姿を見出す必要がある。又、高齢者は、老病を生き諸行無常のかけがいのない人生を一瞬一瞬生きている存在でもある。死ぬ身を生き抜いている存在と便利なものに振り回されながら生きている学生がやがて自らが行く道のりと感じながら介護にあたって頂きたいと願う。人が人を介護させて頂く源流がそこに存在するとであろう。私たちは、老いや病やしょうがいを抱えて生きる人たちも尊い人として今を生きている存在として係わることができるのであろう。

アンケートを概観する中で施設での利用者の看取りは、「迷惑をかけたくない」という思いの下に死を了解するのであろう。限られた人ではあるが葬式費用や棺に入れて欲しいものを用意している人も居る。しかし、多くの利用者は、真宗高田派の下に社会福祉実践されている本施設に終の棲家として死を暗黙に了解をされている。施設で出会った人の葬儀に参列し、後の法要に参加することを通し一人称の死を了解され死ぬ身を生きているのであろう。

註

- 1 廣恵好日抄 70年の歩み 社会福祉法人高田福祉事業協会 1991年6月1日
- 2 朝日新聞朝刊 2007年5月22日(火曜日) 13版23面 「戦後の家族集った「DK」」
- 3 隔月間インテリアマガジン[コンフォルト] 5月増刊 図説日本の「間取り」(株)建築資料研究社 2001年5月1日 P.150
- 4 増田樹郎、星野政明、川野雅資 看護の禁句・看護の名句 黎明社 2006年8月20日
- 5 禅の友 曹洞宗宗務庁 2007年5月号「お寺に行って元気になろう」 P.16
- 6 総務省統計局 <http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2000/kihoni/00/00.htm>